

1. 序

山田孝雄は『平安朝文法史』(1952)の中で「る・らる」の可能用法について、「この際には打消の形のみ見ゆ」と書いており、後続する研究もほぼこれに従っている。では「る・らる」の可能以外の用法はどのようなだろう。受身・自発・尊敬の三用法で否定に接続する割合と肯定に接続する割合が均衡していて、可能だけが否定接続ばかりであるなら、この特徴は可能用法特有のものだといえるが、もし他の三用法でも否定接続の割合が高いなら、この特徴は「る・らる」全体の特徴というべきことになる。

2. 可能と非可能における否定接続の割合の差

そこで、実際に古代の文献の中から「る・らる」の用例を意味ごとにおいて、その否定接続と肯定接続の割合を比べた。(→〈資料〉)

・可能に否定がついている例

- (1) 目には見て手には取られぬ月のうちの桂のごとき君にぞありける (伊勢物語 73 段)
- (2) 入りたまひて臥したまへれど、寝入られず。(源氏物語 花宴 54)
(朧月夜に逢って帰ってきての場面。朧月夜の正体についていろいろと心をめぐらせ、眠れない。)

・非可能に肯定がついている例

- (3) 「今日は都のみぞ思ひやらるる。」(土佐日記 34) [自発・肯定]
- (4) 銭なければ、米をとりかけて、落ちられぬ。(土佐日記 43) [尊敬・肯定]
「お金がないので、代金代わりに米を与えて、精進落ちをなさった。」
- (5) 「…あやしう、おのが言ふことこそ、あなづられたれ。…」(落窪物語 卷一 83) [受身・肯定]

上記の四分類には収まらない、例えば自発とも可能とも取れるものなどは「自発可能」などとして分類した。

- (6) 目離るとも思ほえなくに忘らるる時しなればおもかげにたつ (伊勢物語 46 段) [自発可能・肯定]
「(会わなくなった友人に) 遠ざかっているとも思えません、お忘れするときがないのでお姿が浮かびます」(自発) ともとれるが「忘れることのできる時がないので」(可能) ともとれる。
- (7) 「…さらに、御堂の間なむ、かねて仰せられはべりしかば、とりおきてはべる。…」[受身尊敬・肯定] (落窪物語 卷二 173)
は、「北の方がかねておっしゃっていたので」(尊敬) とも「法師が北の方に言われていたので」(受身) ともとれる。

- (8) 寝られたまはぬままには、「われは、かく人に憎まれても…」(源氏物語 空蟬 105)
このようなものは否定表現に入れた。

また表中では「能力可能」と「状況可能」に分けているが、実際の用例においてこの分類をするのは難しかった。

- (9) 「…あの國の人を、え戦はぬ也。弓矢して射られじ。…」(竹取物語 50) [可能・否定]
『…あの天人の國の人とは戦えない。弓矢などで射ることはできまい。…』
自分の能力がかなわないからと見て能力可能としたが、天人が強いという状況があるから「弓矢で射られるはずがない」というなら状況可能ともとれる。
- (10) などいらへもせぬと言へば、「涙のこぼるるに、目も見えず、ものもいはれず」といふ。(伊勢物語 62 段)